

乱獲と砂の堆積によって半減した群落

## 加賀海岸のイソスミレ (石川県加賀市塩屋町)

越前加賀海岸国定公園の一部、塩屋海岸から片野海岸の長さ4キロには、広大な砂丘が広がっている。広い所で幅200mに達する砂丘は、日本海側では鳥取砂丘に次ぐもの。ところが、もともとこの地には鳥取砂丘に匹敵する砂丘があった。明治期から、砂防対策で松の植林を進め、現在では面積の8割が松林になった。よって、砂丘はごく一部になった。ところが、広大な松林で砂丘が人から仕切られた事によって、海浜植物が近年まで守られるという幸運に恵まれたのである。

波打ち際に近い半分は植生はないが、東側半分は豊かな植生が見られる。特に、イソスミレの大群落は、日本一であった。過去形なのは、現在は乱獲や砂の堆積が進んで、個体数は半減以下になっている。塩屋海岸の駐車場からすぐに群生地に出られることもある。入口部分から乱獲が始まり、ここは壊滅状態になった。あるスミレの展示会では、堂々と「塩屋産」のラベルが貼られていた。行政にも責任があり、イソスミレが絶滅危惧種であるにも関わらず、一向にこの状況を改善しようとはしてこなかった。再度述べるが、ここは国定公園内である。

昭和58年に、植物研究をなされていた天皇皇后両陛下

が観察に来られ、それを祈念して巨大な石碑が建てられた。来られた意味を少しでも理解されていたならば、もっと違った事になっていたと悔やまる。

そして、もう一つの大きな原因は砂の堆積である。半世紀以前に造られた大聖寺川の我谷ダムで土砂が流失しなくなり、砂が海底に堆積しなくなった。その事によって遠浅であった海岸が削られ深くなり、波が荒くなつた。サーフィンのメッカになりつつある。そして、砂丘では反対に冬期の荒波が砂を押上げ、砂丘が盛り上がって行く。40年前松林との境は、高さ4m程であったが、現在は7~8mもある。これが、2019年に発見したハマネムノキを生む原因でもある。

もともと海浜植物は冬期砂漠になった砂丘から蘇る能力がある。ところが、加賀海岸では想定外の砂の堆積が起っている。そのため、花期に葉が埋まつたまま花を咲かせなければならない。当然個体は衰退の道を辿ることになった。

2020年の4月半ば、個体数の三分の一が砂に埋もれていた。このような事は20年前では決して見られなかつた事である。



砂に埋もれて、からうじて花を付けている。2020.4.16